

2022年10月22日

子どもの日本語教育研究会 研究企画委員会 Project-B

活動報告 読書会(7) 2022年7月17日実施  
『思考と言語 新訳版』  
第6章 子どもにおける科学的概念の発達の研究  
三 発達と教授の相互関係

ヴィゴツキー,レフ.セミヨノヴィッチ著、柴田義松訳(2001)『思考と言語 新訳版』新読書社

第6章「子どもにおける科学的概念の発達の研究」、三「発達と教授の相互関係」では、発達と教授の三つの観点を批判的に捉え、それらを理論的材料として、発達と教授との複雑な相互関係を解明することを一連の研究対象とし、その結果を仮説の事実的基礎づけの可能性を得るために述べています。具体的には、

- 1 書きことばと話しことばの心理…教授が依拠する精神機能の成熟水準に関する問題
- 2 発達曲線と教授曲線…教授と発達の過程の時間的相互関係に関する問題
- 3 形式陶冶の可能性…子どもの発達過程において相互作用を及ぼす、さまざまな教科の学習の意義に関する問題

4 発達の最近接領域…発達の最近接領域の本質と意義に関する問題  
という学校活動の具体的領域における発達と教授の問題の側面を明らかにした上で、

- 5 総括

において、発達と教授の問題に関する統一的思想をまとめています。

個人的には、総括に書かれていた次の箇所が特に印象に残りました。

「教授の可能性は、子どもの発達の最近接領域によって決定される。教育学は、子どもの発達の昨日にではなく、明日に目を向けなければならない。その時にのみ、それは発達の最近接領域にいま横たわっている発達過程を教授の過程において現実によび起こすことができる。」(p.303)

「教授はそれが発達の前を進むときにのみよい教授である。そのとき教授は、成熟の段階にあたり、発達の最近接領域にある一連の機能をよび起こし、活動させる。ここに、発達における教授の主要な役割がある。」(p.304)

今回の担当章から、学校教育において、いかに子どもの発達の最近接領域を教授に活かすべきか、特にプロジェクトBのテーマである「参加とことば」という視点から、自身の日々の実践について振り返り、改めて考えさせられました。昨日がどうだったかということではなく、常に子どもの明日を見据えつつ、子ども自身が最近接領域を活かして発達できるような教授を行っているか、また、そのように参加できる環境を子どもに提供できているか、常に検討していくことが大切だと思います。書きことばと話しことばの学習に関する態度や困難の相違、常に教授が発達の前を進むべきこと、さまざまな教科の学習による相互作用、教授が発達の過程に入り込むことで作用を及ぼすこと、自主的な発達水準と共同の中での非自主的な発達水準との相違こそが発達の最近接領域を決定し、子どもはより多くの困難な問題を解くことができることなどを、論理的に捉え直すことができ大変勉強になりました。

(河野)